

---

# 万夫不当（ばんぶふとう）の軟弱者

長月 四郎

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

万夫不當の軟弱者

### 【Zコード】

N9077Y

### 【作者名】

長月 四郎

### 【あらすじ】

僕の名前は吉北敦、26歳、職業はシステムエンジニア。ひよんなことから中国に出向することになったのだけど、飛行機の中で異変が起き、なんと古代中国は三国志の時代にタイムスリップしてしまうことに。

万夫不當の強者共に囮まれて、軟弱者の僕が未来の知識だけを武器に生き抜いていく  
これはそんな物語。

## プロローグ 過去への出向

僕の名前は吉北敦、26歳、職業はシステムエンジニアだ。情報系の大学を卒業して、まず成りたかったのがゲームのプログラマーだったのだが、どこも入社試験に落ちまくって、しかたなしに入つたのが今の会社、iPhoneやAndroidのアプリを製作している会社だった。

といつてもこの会社だって学校の紹介があつたからお情けで入ったってだけで、まともに試験受けいたら入れなかつただろう。

とにかくゲームが好きだからゲーム会社って希望しただけで、それが駄目だったから似たようなITの会社っていう安易な気持ちで入社したんだけど、結構今の仕事はこれはこれで楽しめている。

入社して3年、他人の企画のiPhoneアプリをいくつか作ってきた。しかし、どれもつまらないアプリでApp Storeのランキング100位にも入らない駄作ばかりだった。

事件はとある飲み会で、酒に酔つて、つい「俺ならもっと面白いアプリを企画出来る!」と口を滑らしたところから始まった。そういう意見を汲んでくれちゃう会社なのだ。

翌日、部長に呼ばれて

「君は見どころがありそうだ。君に企画を任せようと思つ。ただし、経費は抑えろ。だから我が社がオフショア契約している中国の会社にプログラムを作つてもらつ。だから君はしばらく中国へ出向したまえ。良い企画を期待しているぞ。」

といきなり抜擢されてしまった。

気の弱いと自分でも自覚している僕にとっては、これは抜擢ではなく拷問でしかない。企画なんて思いつかないし、そもそも中国に一人で行つて暮らすなんて、ぜつた、ぜーつた、無理！！

しかし、上司の命令に逆らつことは出来ない。これがサラリーマンの悲しい定め。そんなわけで、僕は今、中国は北京空港へ向かう飛行機の機内にいるのだった。

成田を離陸して、もうどのぐらいたつたのだろうか？腕時計はない主義だから時間が分からぬ。「機内では携帯電話の電源を落としてください。」とアナウンスされていたから、iPhoneの電源入れて確認する勇気もないし。まあ時間はいいさ。そのうち必ず着くのだから。さつきちょっと雲の合間から青いのが見えたから、まだ海の上かな。

飛行機に乗るのは、これが人生で初めてだから、何か落ち着かない。隣の席の人は食後にワインをしこたま飲んで、今はいびきをかいて寝ている。機体が時折揺れたりしているのに、よく寝れるもんだ。

僕は音楽でも聞いたら寝れるかと思い、座席に置かれているヘッドフォンを手に取り、それを肘掛の下のジャケットに差して機内放送でも楽しもうとした。

「ジージジー、ジージジー……。」

「なんだ、これ良く聞こえないな。」

操作説明書を見ながら、チャンネルを変えるのだが、良く聞こえ

ない。

「壊れてるのか？」

僕は、ちょっとむきになつて、思いつきり強くダイヤルを捻つた。人には弱い分、物には当たつてしまふのかもしない。良い性格じゃないよな、やっぱ。女口照りが続くのも納得できる。これつて職業のせいだけじゃないよな。

あー、やっぱり嫌になつてきた。中国行きたくない！！別の所に、いや、悪天候のため着陸できないから引き返す、とかないかな。神様お願ひ！！

とその時、突然機内の照明が全て消えた。

「え、なに？嘘？！いや、神様、今の嘘ですよ。」

「ジージジー、ジージジー……、ニインジヤオウオマ？叫我？？」

今何か聞こえた？機内放送入ったのか？そうだ、この事態を説明しているのかもしれない。

僕はそう思つて、さらにチャンネルを捻つた。

「ゴオ――――、ゴオ――――、ドオ――――ン――

もの凄い音を立てて、機体激しく揺れる。まさか、墜落するの？！嘘だろ。僕の人生、これで終わるの？そんなの嫌だ――――。

「兄者、こいつ目を覚ましたぞ。」

「そのようだな。」

中国語……？僕は確かに勉強してきたけど、こんなにほつきり聞き取れたっけ？ってその前に確かに飛行機乗つて落ちたんじやなかつたか？。

僕は今、何故か他人の家にいて、椅子に座つている。目の前にはよく中華料理屋で見るような丸テーブルがあつて、両脇に一人の男性が座つていた。

「やつぱり、生きておつたか。良かつた。良かつた。」

「え、僕どうなつたんですか？どうしてここに。」

まるで意味が分からない。でもどうやら助かつたようだ。でもなんでこんなところに座つているんだろう？しかも……。

「僕の服？スーツじゃなくなつてる！」

「あー、あの変な服か？随分汚れとつたし、ボロボロだつたから、わしの服をお前にあげたんじや。服は焼いて捨てた。裏の竹藪で大きな音がしたと思ったら、そんままの座つた格好でお前が気を失つていたんじや。わしがそれを見つけてここへ運んできたんじや。」

「そんな、じゃあポケットにあつたiPhoneは？」

「何言つとんじや。何語じや。」

どうやら飛行機が落ちたのは中国で、僕は助かったらしい。それでもこの家、なんだか昔のカンフー映画に出ていそうな古臭い家だ。今でも中国にはこういった家が多いのだろうか。やっぱり急な経済成長を遂げたから格差が激しいのかもしない。

「わしの名は糜芳<sup>ビホウ</sup>、こつちは兄の糜竺<sup>ビジク</sup>じゃ。お前の名は?」

そういえば、この人なんか強引な感じの人で苦手だな。でも、なんで僕はこんなに中国語理解できちゃうんだろう。頭の打ちどころ良かったのかな。別に今、頭痛くはないけど。この手のタイプの人は結構礼儀にうるさいから、ここはちゃんとお礼言わないと。サラリーマンとして培つてきた処世術つてやつだな。

「吉北<sup>よしきた</sup>敦<sup>あつし</sup>です。助けてくれて、ありがとうございます。」

「ハア? 何て? どんな字書くんや? ああ、”敦煌<sup>トンコウ</sup>”の”敦<sup>トシ</sup>”かい。敦さんか。」

「ああ、まあ、そうですね。」

「で、どこから來たん?」

「日本です。」

「日本? そんな国ないやろ。どの辺じや。」

この人地理に相当疎いのかな。それとも発音悪かったかな。まあ、ここは外国、丁寧な態度で接しないと。

「えーとですね。東の海を渡った所にある島国です。」

「兄者、知つてゐるか?」

「うーん。それは、倭の国の事を言つておるのかな。私の知り合いに昔、倭の国に行つたという者がいてな。そういえば君のようには背の低い小さい者ばかりの国だと言つていたな。」

お兄さんの方は口調は丁寧だけど、背が低いつて僕がちょっと気にしていることを、よくもづけずっと。でも、ここに嫌な顔をしちゃいけないな。話を合わせないと。

「えー、そうですか。確かに昔倭の国と言われていたようですね。随分、昔の話ですが……。」

「今は違うのか。そうだつたのか、それは失礼した。それより、お客人。もう少しお話をしたかつたが、これから劉備リュウビ様の所へ行かなくてはならなくてな。めでたく徐州の牧に就任されたお祝いがあるのじや。」

“劉備リュウビ様?” つて、

「あの劉備リュウビ 玄德ゲントク?—三国志の蜀の皇帝?—」

「おい、敦さんよ。劉備様の事、呼び捨てにするのはまずいぜ。」

そう言つて麿芳ヒホウがさんが、掴み掛かつてくる。僕は突然のことで顔を強張らせるだけで声が出ない。

「やめんか麿芳ヒホウ! それより客人。今面白い事を言つたな。劉備様

の事を知つてゐるのか？ ちょいびといい。 めでたい宴の席だ。 客人も連れて行こう。」

「兄者、 何を言つてゐんじや。 バレの馬の骨ともわからん奴を連れていつたら 関羽様<sup>カンウ</sup>に怒られるだ。」

“ 関羽<sup>カンウ</sup> ” つて、 やっぱり三國志？！ 僕はいつの時代にいるんだ。 タイムスリップしたの？ バミニューダトイアングルで起るつて言つたば、 東洋にもあつたんだ。

「 関羽雲長<sup>カンウウンチョウ</sup>ですか？ 美髯公の？」

「 ほお。 やっぱりこの客人面白そうだ。 倭人にしては、 なかなかの見識を持つてゐる。 そうだ、 お前は私の親戚、 徒妹ということにしよう。 お前の名は 麻敦<sup>ヒトシ</sup>じや。 よし、 ジやあ早速支度をしろ。 麻芳<sup>ヒホウ</sup>！」 お前もだぞ。」

「 わかつたよ兄者。 麻敦<sup>ヒトシ</sup>かあ、 まあ確かに面白そつだな。」

えーーーーー。 麻敦<sup>ヒトシ</sup>つて “ ヴィトン ” ？ まあ、 ルイ・ヴィトンみたいで格好良いけど、 僕の名前 。 つて喜んでる場合か！

どうやら僕は古代中国、 三國志の時代にタイムスリップしちゃつたみたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9077y/>

万夫不当（ばんぶふとう）の軟弱者

2011年11月27日17時53分発行